

ややこしい
ややこしい

～牡丹餅と
御萩～

芳田尚哉

牡丹餅と御萩

ぶえっくしょん！

豪快なくしゃみで、若い男は隣にいる男を見る。

「兄さん、ちょっとくらい口を覆ったらどうですのん」

「別にええやないか」

「まあ、そうですけど。っていうか、花粉症ですか？」

「そうなんや。この季節は、花見つつう名目で、アホほど酒が呑めるからええねんけど、これがあるのは勘弁やな」

「花見やのうても、いっつも呑んでますやん。夏は暑いからや言うて、秋は食欲の秋や言うて、冬は体を温めるためや言うて……」

「わかっとるやんけ。年中呑むのが男ってもんやろ」

「医者に、控えるように言われてますやろ」

「酒は百薬の長やで。一番の薬っちゅうこっちゃろ」

「適量はそうかもしりませんが、兄さんの場合は呑みすぎやから」

「菓やからええんやって。それよりも、ちょっと甘いもんが食いたなつたわ」

「スイーツってやつですか」

「なんやそれ。酸っぱいもんちゃうで」

「酸いちゃいます。近頃、甘いもんの事を、スイーツって言うみたいですねん」

「なんやそれ。甘いもんは甘いもんやろ」

「自分もそう思いますけどね。で、なにがええんです？ ケーキですか？ シュークリームですか？」

「なに言うとんねん。甘いもん言うたら、和菓子しかあらへんやろ」

「まあ、そうですわな。で、なににしますの？ くず餅ですか？ それともどら焼きですか？」

「せやな……。おはぎがええな」

「お萩ですか。この季節は難しいんちゃいますかね」

「なんでやねん。おはぎは定番やろ。和菓子に季節なんかあるんかいな」

「この季節やったら、やっぱり牡丹餅やと思いますよ」

「ぼたもち？ ああ、あの棚から落ちてくるやつか」

「どういう覚え方なんか知りませんがそれです」

「それって、どんなんやねん」

「兄さん、牡丹餅知りませぬのですか」

「知らんわ。おはぎ一筋やからな」

「それ初耳ですわ。この前、水羊羹食べてた気いしますけどな」

「うっさいわ。とにかくおはぎなんや。今はおはぎが食いたいんや」

「せやから、この季節は難しいですって。自分でも萩や言うてますやん。萩は秋のもんですやん。春は牡丹でっしゃろ」

「それがどないしたんや。おはぎはおはぎや。夏でも冬でも見た事あんぞ」

「まあ、基本的には同じもんですさかい」

「同じもん？ わけわからんぞ」

「最近じゃ曖昧ですけど、季節によって名前が変わるんですわ。春は牡丹餅、夏は**、秋はお萩、冬は**って名前なんですわ」

「なんや、そのややこしいんわ。同じやったら、名前も同じでええやんけ」

「日本人の侘び寂。風流って事ですやん」

「おはぎにワサビなんか入っとるけえ！ お前、ほんまなに言うтонねん」

「ワサビちゃいます。侘び寂です」

「ワサビやんけ」

「もうええですわ。とにかく、牡丹餅買いに行きましょか」

「そうやったそうやった。おはぎやおはぎ」

「せやから牡丹餅ですって」

そんな事を言いながら、二人は和菓子屋に向かうのだった。

F i n o .

ややこしいややこしい～牡丹餅と御萩～

<http://p.booklog.jp/book/110257>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110257>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト